

五月の句

しばらくは 瀧にこもるや夏の初め 松尾芭蕉

たきにこもるや げのはじめ

おらが世やそこの草も持ちになる 小林一茶

そこらのくさも もちになる

絶頂の城たのもしき若葉かな 与謝蕪村

ぜつちようの

しろたのもしき わかばかな

思ひ出を重ねて赤き薔薇を見る 稲畑汀子

おもいでを

かさねてあかき ばらを見る

風薫る旅の鞆に鈴つけて 黛まどか

かぜかおる

たびのかばんに すすつけて

ひざしがつよくなってきました。ふきわたる

そよかぜさえも、きらきらひかっているような

きがしませんか。なにをするのもいいきせつ。

きもちよくこえをだしておんどくしてみましょう。

ごかい

さとうきびのつぼみ

ごかい

かいがい

ちがうかい

すんでいるのが

すなのなか

だから

かいだと

かんがえるのは

ごかいがい

かい

やっかい

かんちがい

なまえにかいが

ついでに

だから

かいだと

かんがえたのは

ごかいがい

「ごかい」という、つりえさによくつかわれるむしをしていますか。貝(かい)ではありません。「かい」のくりかえしをたのしんでよんでみましょう。



おくのほそみち につこう

まつおばしろう 松尾芭蕉

うづぎついたち、おやまにけいはいす。

卯月朔日、御山に詣拝す。

そのかみ、このおやまを

「ふたらさん」とかきしを、

往昔、此御山を「二荒山」と書しを、

くうかいだいし かいきのとき、

「につこう」とあらためたもう。

空海大師開基の時、「日光」と改給ふ。

せんざいみらいをさとりにたもうにや、

いまこのみひかり いったんにかがやきて、

千歳未来をさとりに給ふにや、今此御光一天にか、やきて、

おんたくはつこうにあふれ、

しみんあんのすみかおだやかなり。

恩沢八荒にあふれ、四民安堵の栖穩なり。

なお、はばかりおおくてふでをさしおきぬ。

猶、憚多くて筆をさし置ぬ。

あらとうと

あおばわかばの ひのひかり

あらたうと青葉若葉の日の光

松尾芭蕉さんは、四月一日、今の日光を訪れて

います。「二荒」を「につこう」とあらため、字を

「日光」としたことがつづられています。また、

徳川幕府への敬意から多くを語ることをためらった

とのことです。

胡隠君を尋ぬ

こうけい 高啓

みずをわたり

またみずをわたり

渡水復渡水

はなをみ

またはなをみる

看花還看花

しゅんぷう

こうじょうのみち

春風江上路過

おぼえず

きみがいえにいたる

不覚到君家

漢詩(かんし)をよんでみましょう。

ふるいちゆうごくのボエムです。

かわをわたり、またかわをわたり、

はなをみ、またはなをみて、

はるかぜのそよぐかわぞいのみちを

いつのまにか、きみのいえにきてしまった。

